Dear-親子のキズナ-

紫羽月桜鈴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｄｅａｒ－親子のキズナ－

【Ｎコード】
Ｎ６８０８Ｔ

【作者名】
紫羽月桜鈴

【あらすじ】
私の人生は　それはそれは輝いていたと
母が言っていた。

過去ノ記憶

蛍の飛びかう夏の夜。
私は生まれた。

――――オギャー・・・
「生まれた・・・！！僕たちのっ・・・」

しかし、生まれたと同時に、私は死の宣告をうけた。

「……え？先生、どういうことですか」
「娘が、何だって…？」
「…娘さんの心臓は、正常な心臓と比べて血液を送る力が極端に弱いです。今はまだ、明確な治療法が見つかっていません。」
「……じゃぁ、娘はどうなるんですか！？」
「……」
「先生ぇ！！！」
「……もって、6～7年は生きることができるでしょう…」
「そ、んな……」
「手は尽くします。気をしっかりもってください…」

長生きはできない。
小学校ですら、行けるかどうか分からなかった。

「…ねえ、この子の名前、どうする？」
「僕は…。元気に育ってくれればそれで…」
「…私はね、儚い命だから、『螢』なんてどうかしら、って思ったの」
「螢か…。いいな、その名前」

「ふふっ。意味はね、儚くても、一生懸命に光って、そして、誇らしげに消える…」
「……光って消えてしまうとしても、僕たちにできる限りで螢を守ってやろう」
「えぇ。たくさん愛してあげましょう…」
「あぁ…」

私の名前は螢。
ありがとう、お父さんお母さん…。

「さあ、今日の主役は螢だ！一歳の誕生日、おめでとう！」
「螢、生まれてきてくれてありがとう！はい、プレゼントよ！」

今日は6月8日。そろそろ蛍が飛んでいるだろう。
綺麗だろうな…。

「ぱぱっ、ままっ、あーいがとっ！！」
「そんなっ…。私たちのほうこそ…うぅ」
お母さんが泣いた。それを見てお父さんまで泣き出した。
小さい私はこう聞いたっけ。
「どうちたの？いたいたいの？」
「ううん、螢。嬉しいのよ！こんなに元気に育ってくれたことが！」
「そうだよ、螢。嬉しいから、泣いてるんだ」
「えへへぇ＊」

三歳を過ぎたころから、お母さんは毎日あることを私に話してくれた。

「ほーたーる。短い命でも、最後まで一生懸命に光っていてね…」
「ママ？」

「あなたは綺麗よ、とても。とーっても輝いてるわ」
「かがや…？」
「光ってるってこと」
「…ほたる、今光ってるの？」
「ええ、これでもかってくらい！」
「えへへへ」
「ふふっ。あのね螢。あなたの名前はね、蛍が飛んでいる時期に生まれたからなのよ」
「ほたる？それってなに？？」
「蛍はね、おしりがピカピカ光っているのよ。とても綺麗なんだから！」
「わあ！！」
「今度見に行こうね」
「うん！」
「それまで……」

お母さんがそのとき何を言ったのかは分からなかった。
ただ、強く私を抱きしめて泣いていた。

時間はあっという間に過ぎ、私は六歳になった。
もうすぐ卒園する。
お母さんの希望で、クラスのない、みんな一緒の保育園に通っていた。
たくさんの年の子がいて、みんな仲良しだった。

「みんな、今日はお父さんお母さんにお手紙を書きます。そのために螢ちゃんと一緒に字の練習をしましょう！」
「はーーーい！！」

その日、私は未来の両親にあてた手紙を書いた。

先生以外、お父さんお母さんも知らない。
と、そこへ一人の女の子が来た。

「ほたるちゃん、何書いてるの？」
「…未来のパパとママへのお手紙だよ」
「みらい」
「うん」
「そっか、そうなんだ。きっと喜んでもらえるよ！！」
「うん！ありがとう！」

あれから六年経ったけど、まだ治療法は見つかっていない。
もうすぐ死んでしまう。
そのことは、幼いながらになんとなく解っていた。
今日は調子がいいけど、最近、倒れることが多かった。
それでも必死に頑張っていた。
けれど、私が思っていたより体は限界だったらしい。
手紙を書き終えた瞬間、私は倒れた。

次に目を覚ましたのは、倒れてから二日後の病院内だった。
ちょうどその時、保育園の先生がいた。

「螢ちゃん！待っててて、いま」
「ねえ、先生」
「な、何？」
「ほたるの手紙、ほたるがいなくなったら、パパとママにあげてね」
「…わかった。でもまだだめよ。まだ螢ちゃんは生きてるじゃない。ここにいるじゃない！」
「……」
「諦めないで。お母さんと、約束したんでしょ？この前嬉しそうに先生に言ってたじゃない」

「…ぁ…」
「ね？だから、もう少し、最後まで…」
「うん、がんばるね先生」

それから一週間後、私は退院し、無事卒園することができた。
そして、あっという間に入学式。
でも弱った体に新しい環境は容赦なかった。
また、倒れてしまったのだ。
ついに私は長期入院をしなければいけなくなった。

現在（イマ）

再び目を覚ましたとき、そばにいたのはお父さんとお母さんだった。
二人は泣き腫らした目に、驚きの色を加え、大きく見開いた。
「ほたる・・・？」
「あぁ、良かった！！！もう、もう目を覚まさないんじゃないかと・・・！！」
あぁ、それ以上泣いたら目痛くなるんじゃない・・・？
けど、その言葉が音になって口から出ることはなかった。
「ほたる、私たちのこと、分かる？」
（何で？ほたるのお父さんとお母さんじゃない。）
また、空気がかすれるだけだった。
仕方がないので、コクリ、とうなずいた。
「じゃあ、今日がいつだかは？」
分からない。けれど、倒れてからそんなに日は経っていないはずだ。
フルフルと首を振った。
「あなたが倒れてから一年経ったの」
「おまえの心臓が今までもったのは奇跡だと、さっきまでいた医者が言ってたんだ」
「でも、これ以上はもう無理だって・・・。目を覚ませばまだ希望はあるだろうがって」
・・・一年？
じゃあ、今までのは、夢？
「ほたる？」
「声が、でないのか・・・？」
コクリ、と、うなずくことしかできない。

お父さんたちがすぐに先生を呼び、原因は簡単だ、と言われた。
「一年も寝たきりで、言葉わ発していなかったんだ。話し方を体が

忘れても仕方がない。大丈夫ですよ。水分をとり、しばらくすれば、また話せるようになります」

「そうか・・・。そうか、よかった・・・！！」

現在（イマ）（後書き）

力尽きました・・・
また次回・・・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6808t/

Dear-親子のキズナ-

2011年10月7日21時42分発行